

4節 余剰の功績について

4 神の前に行いによって、余分の功績を積むことなどできない。

その服従において、この世で可能な最高な高さにまで到達する人々も余剰の功績を積み、神が要求される以上のことをすることなど到底できないばかりか、義務としてしなければならないこともできないのである。

「あなたがたも同じことだ。自分に命じられたことをみな果たしたら、『わたしどもは取るに足りない僕です。しなければならないことをしただけです』と言いなさい。」 ⑧

ルカによる福音書 17・10

※この聖句に対するカルヴァンのコメント。

「聖書は、我々の全ての行いが神の目に見られるとき、それは不潔に満ちているので何の功績にも価しないことを示し、次に、〈命じられた全てのことを果した時、我々を無益な僕と自ら看做すように〉と命じた箇所において(ルカ 17・10)、律法の完全な遵守が(仮に、こういうものが見出されたとしても)どれだけの功績に価するかを示している。すなわち、我々から義務なしに主に差し出せるものは何もなく、負っている義務を果たすだけであって、これについて感謝されることはないのである。」

(綱要) 3-15-3

「私はレビ人に命じて、身をきよめさせ、安息日をきよく保つために、門の守りにつかせた。私の神。どうか、このことにおいてもまた、私を覚えていてく

ださい。そして、あなたの大きいなるいつくしみによって私をあわれんでください。」 ㊦

ネヘミヤ記 13・22

※安息日の厳守に関するネヘミヤの改革。「ツロの商人たちを含むこのような厳しい対応は、政治的、経済的に損失を招く危険をはらんでいたが、神への信仰を第一にするイスラエル民族には、犠牲を払ってでも行わねばならない処置であった。経済界の有力者たちから不満や反対の声が上がったに違いなく、ネヘミヤは、神に覚えていただきたいと祈って、主にゆだねた」(辞典)。ネヘミヤは、なすべき義務を果たして主にゆだねた。

「それは確かにわたしも知っている。

神より正しいと主張できる人間があろうか。

神と論争することを望んだとしても

千に一つの答えも得られないだろう。」 ㊦

ヨブ記 9・2, 3

「肉の望むところは、霊に反し、霊の望むところは、肉に反するからです。肉と霊とが対立し会っているので、あなたがたは、自分のしたいと思うことができないのです。」 ㊦

ガラテヤの信徒への手紙 5・17

※ この4節は、宗教改革者たちが非聖書的と非難し、免罪符の販売につながった当時のローマ・カトリックの「免償」という教理を批判して設けられている。

「免償」とは、「自らの努力で罪を償うことのできない者への罪の免除を言い、後には免償の証書（いわゆる「免罪符」）をこう呼ぶようになった」（綱要）3-5-1脚注。

カルヴァンは、（綱要）3篇5章で、この教理を詳しく批判している。免償の教理について、カルヴァンは次のように定義する。

「殉教者は自らに必要以上のことを、死によって神に果たしたので、より多く功績ある者とされ、それだけ余分な功績が、他の人の上に溢れるようになった。そこで、このような賜物が無駄にならないように殉教者の血はキリストの血に混ぜ合わされ、両者は合わさって教会の宝をなし、罪の赦しと償いとされる。」（綱要）3-5-3

「彼ら（※ローマ・カトリック）はキリストと聖なる使徒及び殉教者の功績を〈教会の宝庫〉と呼ぶ。この宝庫の根本的な守護の任はローマ司教に渡され、このように優れた宝の配分は彼のもとに置かれ、彼は自分でこれを施すこともできるし、施行すべき裁判権を他人に代行させることもできると彼らは空想する。」（綱要）3-5-2

「免償の管理とはキリストと殉教者の功績を教皇が教書によって配分することだと定義する。」（綱要）3-5-1

「免償は、ペテロやパウロや殉教者たちを通じて罪の赦しを振りまいている。……免償は〈殉教者の血こそ罪の洗いである〉とする。……免償は、〈罪の償うのは殉教者の血だ〉とする。」（綱要）3-5-2

以上のような免償の教理に対して、カルヴァンは次のように反論する。

「(免償の教理は)、キリストに名だけを残してその他通俗の小聖人の一人にし、

彼らと見分けがつかないようにしてしまうことでなくて何であろうか。罪の赦し、償い、聖化が主張されるところでは、ただ彼ひとりが宣べ伝えられ、彼のみが差し出され、彼の名のみが呼び求められ、ただ彼のみが注視されねばならない。」(綱要)3-5-3

また、その昔アウグスティヌスも、「殉教者の血が罪の赦しをもたらすことはない」と言っているとして引用する。

「アウグスティヌスはこれに劣らず明快である。曰く『我々が兄弟たちのために死ぬことがあるとしても、殉教者の血が罪の赦しのために流されることはない。これはキリストが我々のために果たしたもうことであって、我々がこの真似をするのでなく、我々は賛美すべきものとしてこれを賜わるのである(ヨハネ福音書論84)。』同じく別の所に言う。『ただ独り神の子が、我々をご自身と共に神の子とするために人の子となられたように、ただ彼のみが、我々には何ら善に価するものがないのに、受くべきでない恵みを賜わる者とするために、御自身は何ら悪に価しないにもかかわらず、我々のために罰を受けたもうた』(ポニファキウスに与える書4-4)。』 (綱要)3-5-3